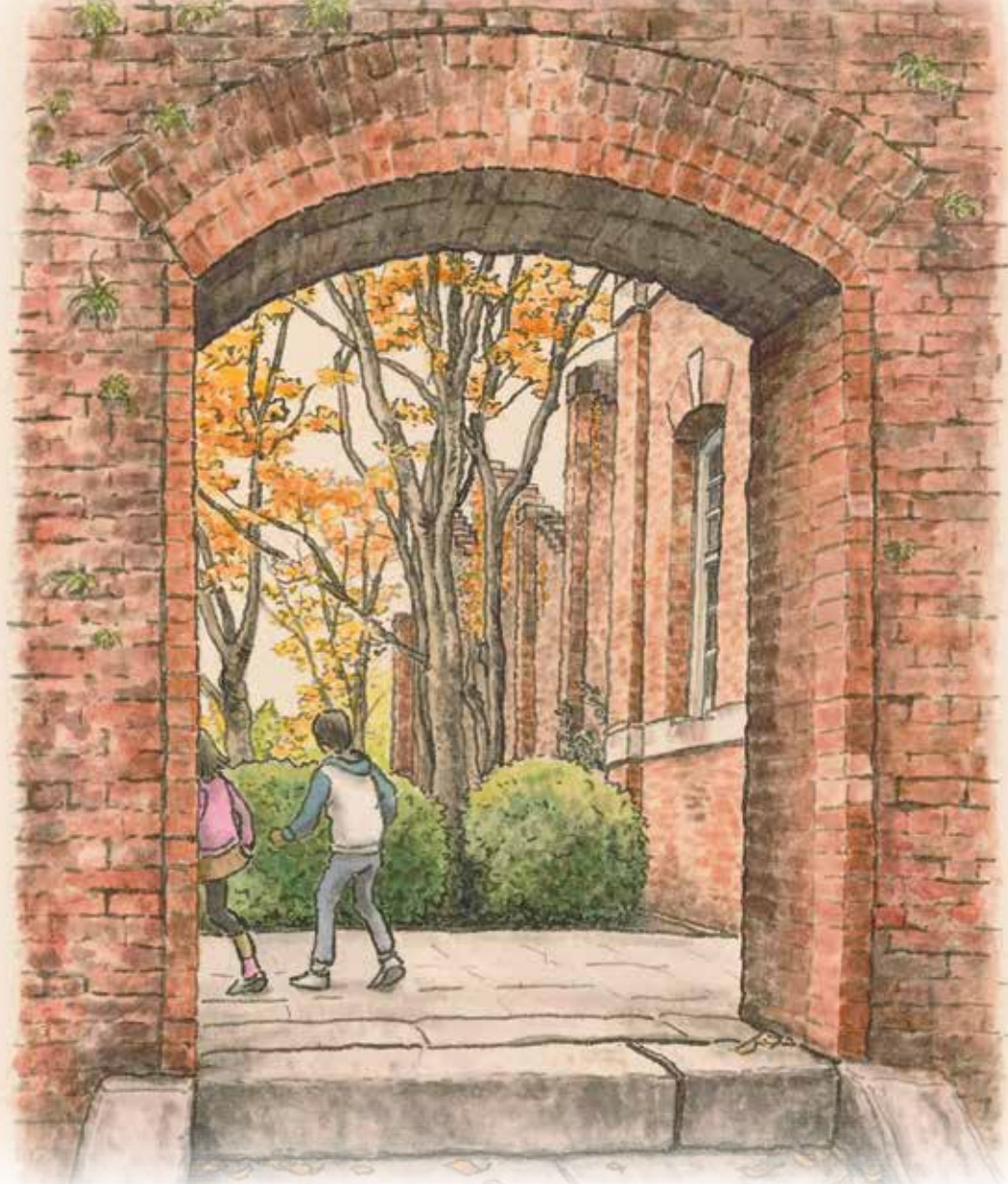


# 煉瓦の公園

絵と文 福山聖子



団地の真ん中に、古い煉瓦造りの建物と木立に囲まれた異空間の公園がある。その中でバギーに赤ちゃんを乗せたお母さんが紅葉をたのしんでいる。明治時代に創業し、昭和50年に封鎖された紡績工場の建物の一部で、「市民が選ぶ文化財」に選ばれている。

かつてボイラー室だった建物は、団地の集会所になっていて、扉からなにかの集まりを終えた女性たちが出てきた。目の前の紅葉を見上げて「お日さんがあたってきれい」「ほんまにきれいやなあ」「でも風で散ったらたいへんやで」と、しばし言い合ってから解散していった。

少し日が傾くと、年の違う子らが集まって遊びだした。年長の女の子が遊びのルールを決めて、みんなに「この門がスタート」と説明。「おわかれグッパ」で二組に分かれてリレーをするらしい。煉瓦塀の門の下でスケッチしているわたしなんかお構い無しに、脇を子らが駆け抜け小さい嵐が巻き起こる。

煉瓦造りの紡績工場は、太平洋戦争中には軍需工場だった歴史もある。いまはこうしてまちづくりに活用され、子どもたちの歓声が響き住民が憩う空間となった。

—— 東大路高野第三住宅の公園 元鐘紡京都工場

福山 聖子 ふくやま しょうこ

京都市生まれ。嵯峨美術短期大学洋画科卒。まちや里山の古き良き佇まい、暮らしの風景などを絵と文で描いている。朝日新聞滋賀版、その他出版物に滋賀の風景をテーマに連載している。画文集「水のしらべ 琵琶湖のうた」(ナカニシヤ出版)。